

『最新流行』（第一号）

ステファヌ・マラルメ
山中哲夫 訳

モード

宝石

パリ 一八七四年八月一日

夏のモードのことをお話するには遅すぎますし、冬のモードのことを（秋のモードでさえ）お話するには早すぎます。もつともパリのいくつかの有名なお店ではもうすでに晩秋のコレクションに忙しいことは知っておりますが。そこで、今日は婦人服のお話をはじめには手元に必要な材料がありませんので、衣裳の最後の仕上げとして役立つ品のことを皆さまにお話したいと思います——宝石のことです。（婦人服の前に最後の仕上げだなんて）変な話でしょうか。いいえ。宝石にはなにか永遠に変わらないものがあるのではないのでしょうか。七月から九月のモードを待つて書くことになっているこのファッション通信欄でお話するにふさわしい永遠なものが。

宝石をさがしましょう。それ自体で独立した宝石を。どこに？ いたるところに。この地表にはわずかしきありませんが、パリにはたくさん、ということですから。パリは宝石の世界を提供しているのですから。なんとすばらしいこと

でしよう！　どんな地方も、その自然によつて、一種の植物相と同様に、人間の手になる完璧な宝石匣を表わしているのではないでしようか。美の本能、さまざまな気候との関係の本能、それぞれの空の下で、薔薇やチュートリップやカーネーションを産み出す力をもつたこの本能は、イヤリングや指環やブレスレットなどと無関係のものでしようか。花と宝石——それぞれの種類がその出生地を告げているものようではありませんか。これこれの太陽の輝きはこの花に適している、この女性のタイプはこの宝石に、というように。こういった自然の調和は過去においては支配的でしたが、いま現在はすたれていくように思われます。たとえ、いまでもまだ野卑な目をしている人々や、あるいは私たちには文明に不向きだと思われるある種の農夫たちをのぞいたとしましても。「文明」！　この言葉はこうお読み下さい——《宝飾界においても、調度家具の世界と同様、創造的な力がほとんどすべて消え失せてしまった時代》と。ですから、調度家具の世界と同じようにこの宝飾界においても、私たちは発掘したり輸入したりせざるを得ないのです。なにを輸入したらよいでしようか？　インド産の糸硝子のブレスレットや中国産の縁がぎざぎざの紙でできたイヤリングでしようか。いいえ。そういうものではなく、そういうものを作る際に重要な役割を演じているナイヴな趣味をこそ輸入しなければいけません。なにを発掘したらよいでしようか？　そのけばけばしい輝きで舞台のピロード地や聖具室の金欄を飾る、忘れられた数世紀の重つたるい装飾品でしようか。全然。そういうものが威風堂々たるタッチとして衣裳に飾りつけられたその大胆さをこそ発掘しなければいけません。非常に異なった金銀細工技術の二つのインスピレーション、つまり正統古代と夷狄古代のなかのこれらのインスピレーションの、さらに以前の源流にまで遡らなければならぬかも知れません。つまりあのカンバーナ博物館のことです（人はまだ忘れておりません）。フロマンシムーリスやルーヴナやフォントネという名の偉大な宝飾デザイナーたちにおたずねになってみてください——彼らの感嘆したくなるような学識と技術、これはいまではまったく危機に瀕しておりますが——この学識と

技術はクリュニー美術館のガラスケースやパリの日本商館や、さらにアルジェリアの商館などと同様、そこ〔正統古代と夷狄古代の源流〕から発しているのではないかと。

このようにただパリだけが世界を要約するのです。それ自身、市場であると同時に博物館でもあるパリだけが。奇異なものでパリが受け入れられないものはなにひとつありません。精巧なものでパリが売らないものはなにひとつありません。確かにロンドンには、本物の稀有な宝石類がありますし、私もその一種のアンチームな魅力を知っておりますが、それもせいぜい私たちフランス人の欠点のひとつよりも好ましいというにすぎません。つまり、宝石がデザインにおいて精神的であるというこの欠点よりも。単純にただの装飾家でありましょう。「装飾」！ すべてはこの言葉のなかにあります。大切な宝石のカットデザインを誰に依頼したらよいかまよっていらつしやるご婦人には、こうおすすめます。正装用のドレスを作り上げる有名なファッションデザイナーよりも、ホテルを建てる建築家にそれを依頼なさった方がよい、と。一言でいえば宝石とはそういうものなんです。このことはこれくらいにしまして、月並な話からこんどは細部の話に移りましょう。

ほんの単純なこと。次のことはいままでは当り前になっています——ブルヴァールやド・ラ・ペー街やパレ・ロワイヤル⁽¹⁾などを午後⁽²⁾に連れ立って散歩したり、有名なアトリエを訪れたりするだけで、私たちは知るので、陳腐な言い方をそのもとの意味で使えば、《この世で作られたもつとも見事なもの》(世間でもつとも流行っているもの)すべてを。

奥様方、もしおのぞみでしたら、人生の歎びや成熟の域に入った年齢に関わる宝石のことをもつと詳しくお話するまえに、お嬢様方のシンプルな装いに役立つ稀な宝石や貴金属のことをお話しましょう。

ここに十八歳から二十歳の若いお嬢様のためにエレガントなお母様ならえらばれそうな宝石のいくつかがあります

す。「街着」のためには、金一色のイヤリングと、首に巻く黒いビロードのリボンにびったりのちいさな留金。それとはまた別の品ですが——昨日思い出のなかをさぐって思い起すのですが、いつも首に結ぶ、うすい、とてもうすい蔷薇珊瑚でできた魅力的な装身具と、それと同じ種類のネックレス。またトルコ石でできた別の装身具と、同じトルコ石のちいさな留金（これは本当に若いお嬢様そのものです）あるいはトルコ石と真珠でできた装身具。そういうものを夢想していますと、ペンダント型のイヤリングや先端に極く小さな真珠のついた矢形の小型ブローチまで目に見えてきます。こういうものは本当にすばらしいものです。世間では幸運を呼ぶものとして純金だけの、あるいは真珠とトルコ石のついたプレスレットを腕にはめ、指にはただ一個の指環をはめています。それもつねにシンプルで、キラキラせず、エメラルド色でもなく、七宝加工の、あるいはせいぜいちいさなミニアチュールのついた指環を。空想の世界でなら古代にあった類の寶石で飾られたいぶし銀製のイヤリングや十字架のペンダントを自由にえらべることでしょう。その宝石の起源がブルターニュ地方でも、プロヴァンス地方でも、ノルマンディー地方でも、あるいはドイツやオランダでも。昼間にあしらう宝石類は夕べの宝石類とはまったく別のものですので、例えば私たちが結婚の花籠を作らなければならない場合、その両方の宝石類を細心の注意を払って並べることになります。

「結婚の花籠」！——まずなんといっても芸術的にこしらえられた金無垢一对のペンダント型イヤリング、それも長いイヤリングを入れます（最近の流行がこれなんですから）。それに合わせて鎖のついたすてきな十字架のペンダントをえらびましょう。それから二番目のイヤリングは青金石ラピスラズリでできたもの。これは今日ではとても高い評価を得ています。三番目はもつとドレッシンなもの。梨か林檎の形をしたカボション・カット（半球状型カット）のガーネット。末端にダイヤモンドの飾りがついています。そしてこれらの宝飾品のどれにも似合った袖口の飾釦。

次に、晩餐会か夜会のために、鉦型イヤリングとメダイオンをえらびましょう。メダイオンのまんなかにはとても

大きな黒真珠が占めて、そのまわりを三列にブリリアン・カットのダイヤモンドが取り巻きます。これは現在、有名な寶石デザイナーの間でも、まったく新しい品です。このデザイナーの名は先に挙げておきましたが、この他にもまだ有名なデザイナーはいます。

とびきり美しい装身具がこのとなりになります。テール・カットされた、そしてブリリアン・カットのダイヤモンドに取り巻かれたサファイヤを組み合わせたもの。サファイヤという宝石は、現在ではいままで以上に求められている石ですが、これはその少しくすんだ輝きで、燦然と光るエメラルドの色を抑える石です。ネックレスにも同じようなものを。私たちがずいぶん前から知っているあの永遠の単石のダイヤモンド、ブリリアン・カットのダイヤモンドよりも、私はこれらのヴァリエーションに富んだ宝石類を好みます。

ブレスレットのことをお知りになりたい方がいらつしゃいますか。昨日、金とルビーでできたキラキラしたブレスレットを見かけました。それからブリリアン・カットのダイヤモンドとかエメラルドとか、あるいはカメオとかでできた指環をいくつか（カメオはリバイバルで流行ってきました）。シヨールを留めるブローチの選択は皆さまにおまかせしましょう。

ちいさな香水壺——いろんな金細工の、あるいは薔薇色の、緑色の、黄色の、ルイ十五世様式の、あるいはルイ十六世様式の、花綵紋様のついた（または日本風の花鳥紋様のある七宝でできたモダンな）香水壺は、レース刺繍のハンカチのそばに置くのに欠くことのできない品で、これは忘れてはならないものです。扇にしても同じです。「朝の装い」のためには、薔薇色か青色か灰色で描かれたグワッシュの黒絹製のものを。「セレモニー」のためには、絵柄のついた白絹製を。絵柄は片隅になければいけません。まんなかではだめです。いずれにしましても、一本の扇に値するものはありません。留金はできるかぎり豪華に、あるいはできるかぎりシンプルにして、でもなによりも

イデアルな価値を表わすものを。どちらの扇のことですつて？ 絵柄の扇の方です。古いものではプーシエ派やヴァトー派の、あるいはこれらの巨匠による絵柄を。現代的なものでは、本誌の協力者エドモン・モランのものを。ホテルの正面階段や古くからある公園や舗道や砂浜などで、現代人は一年を通じて催される饗宴を共にしているのです。貴婦人方の手にあるこれら稀有な名品が私たちに見せてくれる光景がこれです。

奥様方、いままで陳列してきましたこういうものすべてが、それぞれの意味をもって「花籠」のなかに納められるのです。それと、値段はいくらでもいいのですが、インド産のカシミアのシヨール。この大切な服飾品はめつたに使われることはありませんが（最近の「流行」はもうこれを普段に纏うものとしては認めていませんので）、東洋風の装飾りのついたこのシヨールを肩からはずして、それで他のすばらしい品々をお包みください。つまり先ほど宝石類や真珠類についてひとつずつお話しましたが、そういうものがすべて入ったすてきな宝石匣をそのシヨールでお包みください。ダンテル編みについてですが、これは凡庸というものを知らない妖精自身の手になつたものでしたらなんとしても欲しい品です。シャンチイー製の装飾りやスカーフの襟先やチュニックや扇やパラソル、あるいはブリュッセル製の縫付けレースの装飾りやチュニックや扇やパラソルまたはハンカチ（手縫い）、こういうものはえらばないでおけばよいのです。ピロードや絹で私たちの「花籠」を一杯にしようとは思いません。そういう織物は「お針子さん」の領分ですから。お針子さんと言えば次のような話を聞きました——でもこれは予想しておかなければなりません——トウルニユール（腰当て）にひとつの決定的な変化が起こることを覚悟しておかなければならない、というのです。トウルニユールにはもうその存在理由がないと言われております。ウエストはもう矯正する必要がなくなつたからです。胸が長かつたのは、長すぎるほどでしたが、それはほとんど昔のこととなつたからです。

「モード」は、こんどは、「絵画展」から生まれるのではないのでしょうか。前世紀のあの長い胸を押しつけて、若

く現代的な顔が勝ち誇るいくつもの肖像画に、最初ひとは驚いたものですが、そのうちなにか満足感のようなものを感じはじめてきました。⁽³⁾ 来年のシーズンまでこのリバイバルが続くとすれば、その興味深い出発点はこの九月初旬ということになりました。 いまでは私たちの目はさまざま虹色光彩やガラスケースのオパール色化や宝石の燦きなどによって目眩まされているのですから、容易には「未来」と同じくらいに曖昧なものか〔モード〕をはつきりと眺めることはできないのです。

マルグリット・ド・ボンチイ夫人

今日の水彩風リトグラフ（別刷）と本文中のモノクロ挿絵に見られる衣服の実物大切抜き型紙についての説明

I 水彩風リトグラフ

ひと月早く刊行される本誌内容見本号の水彩風リトグラフでは、いまから九月のモードをお見せすることはできません。ですからこのリトグラフは雑誌（グラビア版）にこの夏発表された豊富なコレクションの中からたまたま取り上げたものです。皆様には私たちの服飾の中から七、八種のさまざまなタイプをお見せいたします（裏表紙の通信欄の五月、六月、七月、八月初旬の装いの説明をごらん下さい）。

II 本文中のモノクロ挿絵

第一頁

一、マリンブルーの絹のペティコート。同じ色合いのカシミア地のスカート。スカートにはトルコ石ブルーのラッフルと折返しがついています。ラッフルとそのまわりにはマリンブルーの絹の小さなバイアス。裾がW字になったコルサージュはカシミア地でツートン・カラーの絹の装飾りつき。すべて真珠をちりばめた黒い糸レースで飾られています。

見開き頁

二、八歳から十歳までの男の子の服。ヴェスト、パンタロン、濃いブルーのラシヤ地のチョッキ。黒い絹の組紐で縁取られています。パンタロン、両袖、ポケットには黒い絹の飾りざれ。

三、八歳から十歳までの女の子のベージュの服。栗色のピロードの装飾りのついたプリーツスカート。背中にびったり合わせたハーフコート。裾飾りは前にわずかで、脇と後にとても長く、背中ではとても短くなっています。両脇には栗色の木製のボタンのついたポケット。

Ⅲ 実物大切抜き型紙

この内容見本号では今年の夏の装いの切抜き型紙をつけることができませんでした。水彩風リトグラフで代用しておりますが、一部ごとに刷りが異なっております。けれども九月六日日曜日号の予約購読者の皆様には、特別刷りの水彩風リトグラフとともに、切抜き型紙をご奉仕いたします。これらについては今日の裏表紙に説明書きがございます。

パリ通信

演劇・書物・美術及びサロンと海辺の噂

これは過去のない年代記とでも言いましょうか。過去のない年代記？ 年代記というものはただ未知の未来への思いのみを抱いて到達するものです。本誌『最新流行』刊行準備号は、殆ど七月から九月にかけての大衆の目に残ることを目的としています。パリのひと月は永遠そのものよりも曖昧で不明確な期間ではありますまいか。今日私たちが通りすぎてしまう、このきわめて現実離れた生活の相を種に、一般的な話をしましょう。これはこの「談義」の冒頭にふさわしくないこともないでしょう。これら短い話題はそれぞれに本誌において各自の場所を占めていますが、この話題の意味するものがお分かりになれば、「モード通信」と文学的戯れの間で、その場所がきわめて妥当に選ば

れていることがお分りになると思います。文学的戯れ——もちろん精神的な作品について語ることですが、それもつねに今日の趣味にしたがつて。本誌は言うなればここではじめて公表された詩篇オエジーが出合う「新詩集」でもあり、またはつもの書き下ろしの二週間分の「短篇」が読める「短編小説集」でもあるのです。これら最近の成果（さらに他にもありますが）は果して流行っているでしょうか（ファッションのように）、あるいはそうであるべきでしょうか。批評することは他愛ないことでしょうか。否シ。どんな女性も、香水や宝石、あるいはまた自分がそれになりきった小説の登場人物を愛するように、詩句を愛するものです。批評というものはこの絶対的地点から出発するのです。ですから、しんじつ彼女たちに気に入ること、それに値すること、これが大事です。韻文や作品が例え成功を得たとしても、批評ほどご婦人方の心を獲得するものではありません。この野望は批評にこそふさわしいのです。繰り返しになりますが、しんじつ、読者というものはや存在せず、存在するのは女性読者だけである、と固く信じております。「政治」から離れた、また陰気な家事から開放された婦人のみが、化粧を終えたあと、魂をもまた飾ろうという欲求が香りのように発散する楽しみを持っているのです。シメールの飾りがついた絹織のクッションに、それとなく置かれた香水壺のように、なにか書物が一週間ひらかれたままになっているということ、そして、香水壺がこの試しの場所から、漆の飾棚に移され、しかもそこは次の饗宴まで閉じられた宝石匣にほど近い場所にあるということ、これこそが私たちのきわめて単純な（趣味の）判断様式なのです。もしお望みなら、そこに一言「何故？」と付け加えましょう。この一言は見出し難い一言ですが、これは一巻の書物の題名とともに、短くも完璧な私たちの覚書のなかに永遠に書き込まれるのです。ときとして、ある友から贈呈される書物に彼が添えた微笑が、暗黙裡に、彼の側からのすべての註釈に置き替ることもあるのです。人生の忘れ得ぬ大きな友情は、たいていこの事実から生まれるのです。私もそれとは知らずに本を贈呈する友となっているのでしよう。この書物の数がふえてゆけば、書物の名

を挙げるだけの行数が、図書館のカタログに似てくるようになるでしょう。良きにつけ悪しきにつけ。これはよくあることです。私の話を漫然とお聞きになる人には打ち明けないのですが、実は私には壮麗にして魅力ある驚きがあるのです。それは、この今の私たちの時代ほど、沈黙の中で読まれる作品が産み出される時代はない、ということですが。公平無私の商品ということですが、これは選ばれた人にとっては興味深い作品を意味します。

こういう読書はなかなか魅力のある務めです。ところが、これが観劇となると、事はもつと深刻です。本は退屈でつまらなければ、すぐに閉じられてしまします。そして現代人が陳腐なアヴァンチュールと自己との間に古代の神々のように自由自在に介在させる、あの印象の雲のなかに眼差しを憩わせるのです。これに反して、私たちの存在が、あのボール紙と油彩の布と才能とで出来た洞窟のなかに姿を消す、夜の観劇ということになると、これはなんと避けたい裏切り行為でしょう。演劇の場合は！もしそこに興味を抱かせるに値するものがないということになれば。ガス燈という現実の照明の下では、私たちを包んでくれる雲と言えただだ、じりじりと苛立つ眼差しで皺くちゃにされた雲状の織物のドレスだけです。絢爛豪華であっても、空々しく理解不可能な、目の前のこの生きたマリオネットたちは、強烈で痙攣的な倦怠を背景に、彼らの愚かしさ加減を声高に叫ぶのです。しかしそれでも幸運であれば、このマリオネットの人物たちから、特別な、きわめて稀な悪夢の俳優たちが生まれます。いや、この舞台にはなにもありません。ただ「舞台装置」だけ。北方や南仏の風景だとか、荘厳な宮殿の内部だとか、そういう舞台装置は、それがそういう眺めを喚起しているということだけで、いつもなにか私たちの注意を惹きつけるものを得ることでしょう。また古代の衣裳、それも理想化された（！）衣裳を楽しむことさえあります。そうです、現在の宏大な、崇高な、殆ど宗教的な私たちの「時代」の演劇芸術を見出すべきだということになれば（この談義では三十分くらいの延長ではとてもその理想を述べることはできませんが）、あとは家の近くに沢山の馬車が行列を作っている舞台監

督たちを批判するだけです。この批判、私たちは一年を通じて絶えずこれをやるべきでしょう。人々の純粹な好奇心がけつして衰えないのは、しんどじつパリが——その舞台を世界全体が模倣しています！——つねに好奇心を目覚めさせるものをもっているからなのです。權威をもつて劇作品を位置づけたり、分析したり、判断したり、定義づけたりすることは（一人二役をやらなければならないためにも）、これはただ一般論を繰り返すばかりの月曜の伝統的な「学芸欄」にまかすことにしましょう。そういう記事というものは、私たちが受け入れられる以前、ずつと長い間、それぞれ内輪で、一群の政治的大新聞の元に送りつけられてきたものですから。私たちの美学のすべては次の言葉で言い表わせます——しかしかの広間に楽しむべき場があるか？　ここでは人は笑い、あそこでは人が泣いているような。あるいはまた、真の上演というものは、特別公演の夜の観劇では、フットライトではなく、シャンデリアに照らし出されるものである、と。あるいはまた（一般常識にしたがって）それは楽屋ではなく舞台上で起るものである、と。それでも一年に一、二度、劇作をおさめた仮綴じ本が皆と同様、私たちの情熱をかきたてることもあります。そういうときは激論をたたかわせることさえあります。

まったく個人的な祝祭が二つ——一つは書物の合わさった二つ折の頁が作り出す影のなかに、象牙のペーパーナイフをあてること。もう一つは、これは贅沢で誇らしく、また特にパリならではのことですが、どんなところでも、それが「初演」である、ということ。初演以外には考えられません。また現存の「芸術家たち」の「作品展」の初日は、知的世界の目には、それに劣らないセレモニーであることを示しています。これと同様なものに、骨董品展示即売会や巨匠の「特別作品展」などがあります。「特別作品展」は現在では、ファッション・カレンダーに紅殻チョコレート、あるいは簡単に爪でその日が示されています。私たちはいたるところに姿を現わしますが、いつでも同じように、このような新しい習慣から現代人が引き出し得る歓びの総量に注意を払っています。例えば——《絵画》におけるこ

のジャンルは、まるで私たちのアバルトマンの壁面パネルや天井の装飾のために作られているかのようだ。顔にもつばら現代的な性格を帯びさせることだけに才能がある人には、私たちの肖像画を頼もう。夢想することは誰にでもできることです。黄昏や葉叢、これが夢想製造器(6)となるのです——シャンゼリゼでこの夏、彫刻花壇のなかで賞賛された立像が佇っている、その美しい庭の本物の茂みすらも忘れさせてくれるほどの孤独の片隅。通常の美の型に興味を抱く、というのもこの談義の対象でなくはないのですが、それ以上に、ある芸術家によって表わされた芸術上の狙いのすべてを、デリケートに享受するのに直接利用できるものがその対象なのです。》

《書物、演劇、手に入った彩色の、あるいは大理石の模造品、そういうものは常に「芸術」ですが、日常生活も直接的ですが、大切なもので、多彩であり、私たちの生活にはこまごまとした、しかし重要なものが備わっており、奥様方の話でもそのことが話題となるではありませんまいか。》奥様、あなたの勝利の証人たるサロンに、彫刻を施された付属品として、伝統的な飾鏡に悲喜劇の仮面が添えられていてもかまいません。その仮面のそばにはまた絵筆に混ざって一管のフルートがあるというように。この伴奏の間、その風にとつて自筆の原稿が半ばめくられたりするのは。ただそれも、この古いフランス様式(まだ流行っています！)が、奥様ご自身の姿を映す飾鏡の額縁をシンブルに飾るのであれば、の話ですが。奥様や他のご婦人方がこの鏡に目をやり冬のダンスのリズムが奥様方をこの帝政風の飾鏡の前に惹き戻したとき、奥様方は皆、そこに饗宴の女王をお探しになるでしょう。それは目の前の奥様方ご自身の姿です。事実、いつも誰かにとつての女王であるご婦人で、自分自身にとつてそうでない方がおられますよ。か。沢山の秘密(夜会の艶聞)が上流社会のざわめきから離れて、オーケストラの輝きと混り合うそのまに、ここ「飾鏡」にひとつの反映(エコー)を見出すのです。散った花びらとともに消えていったダンスの相手のリスト(舞踏会の手帖)、コンサートのプログラム、晩餐のメニュー、そういうものはそれ自体で不滅の一、二週間なのですから、確かにひと

つの特種な文学を作り出すものです。ある時代の生活で無視できるようなものはなにひとつありません。いつさいがすべての人たちに属しているのです。微笑みひとつですら！しかしこの微笑みは口元に浮ぶや、すでに、重たいドアカーテンの客間の間を流れまわり、期待されたり、嫌われたり、賞賛されたり、感謝されたり、嫉妬されたり、また、魂をうっとりさせたり、苛立たせたり、鎮めたりするのです。はじめはこの微笑みを隠せると思えた扇も、いまや激しく打ち振って、微笑みを抑えようとしたり、どこかへ飛ばしてしまおうとするのですが、それも無駄なことです。失礼！私は奥様の両の唇の開花の、その優美さを書き留めておくつもりです。こつそりとこれをお読みになつた他のご婦人方の唇が、この優美な微笑みを試されるのですから。まさしくそういうものなのです。私たちの本能のもっとも深い現われに対しては、社交界も繰り返し模倣する権利のようなものを持っているではありませんまいか。社交界はそれを挑発し、洗練してゆきます。すべては生きた形で学ばれるのです。美ですらも。首の構え方ひとつとつてみても、皆は誰かから、つまりそれぞれから盗んで自分のものにするのです。ドレスの着方と同様に。この社交界から逃れるのですか？確かに事態はそこまできています。自然に向つてですか？人は外界の現実のなかで、その風景、その場所もともに全速力で自然を横切つて、他の所へ到達しようとしているのに。これは自然が私たちにとつて不十分なものであるという現代的なイマージュなのです。そうです。天井の上張りの下でのよく知られたさまざまな歓楽が、そのシーズンを屋外での遊び、すなわちブローニーの森の競馬やセーヌ河のレガッタなどに譲つても、なお奥様が森や川を離れて、宏大で裸の水平線によつて惹き起される忘却のなかに、その眼差しを心ゆくまで想わせようとなさるなら、確かにそういうことになります。（奥様がこのようになさるとすれば）それは、その水平線に、見事で賢明な装いの「誰からも見られないという」逆説を巧みに味う、眼差しの新しさを見出すためではないでしょうか。その装いの足元では大海原が泡で刺繍を施しています。いささかの後悔もなく、あたかも正確な時期をはかつ

たようにして、ヴァカンスのシーズンに登場したこの雑誌は、奥様の夢想と海に空という二重の青空との間に置かれるのです。いまやこの雑誌の頁をめくるときです。帯文などお読みになるときではなく。

イックス

金の手帖

—第一葉—

海辺の昼食メニュー

大粒の桃はございません。それはパリのものですから。手入れの行き届いた野菜もございません。このメニューはブローニユからアルカシオンでござ⁽ⁱ⁾奉仕できるメニューです。

牡蠣、アンチョビーのカナペ

サン||マロ風したびらめのフィレ

マントノン羊の背肉

モンペリエ・バター焼シュプリーム・ソースの伊勢エビ

デュロック風若鶏

ポルトーのソルベ

七面鳥の新しい雛

海燕

サラダ——海の貝のビュイソン

地方の野菜

新鮮なアーモンド入アイスクリーム

デザート

葡萄酒

ヴァン・ド・サン||ブリス

ヴァン・ド・ニユイ

レオヴィール

— 第二葉 —

八月の庭の円形花壇^{コルベィユ}

八月の円形花壇^{コルベィユ}！ 実現のむつかしそうな望みですが。太陽、これは庭を花咲かせましたが、また花を萎れさせました。どうすればいいでしょうか？　こうです——ただこの季節の色と欠点を利用して花壇をそれで纏わせること。パリ市庁の園芸家が行うまでは、これは誰も考えつかなかった非常に正鵠を得た、正しい発想です。盛夏の真の円形花壇は次のようなものになるでしょう——この短い時期、あらゆるものが帯びる、暑さによって打ち負かされ、蒼ざめた、埃っぽい様相を、植物から、自然そのものから引き出すような花壇。

レーヌールオルタンス街を通って公園に入る人に、右手の最初の境花壇を見せてくれるものがこの種の花壇です。この季節の疲労倦怠はそっくりCENTAUREA CANDIDISSIMA（白矢車菊）で表わされます。これは二つの皺くちゃの顔もだらしなく同じようになって、蒼ざめ、色褪せ、埃で殆ど白っぽくなった花叢です。この花壇の効果すべては、この植物と他の植物——OBELIA ERINEUS（不詳）との間で發揮されます。乾いて繊細で、固い青の小

花をもったこの植物は、他の花々の間隙をぬって、楕円形の花壇の縁から小さな丘の頂上へと姿を消してゆきます。主調は色褪せたものですが、これがかえって頂上を色あざやかにします。思いがけない、それでいて単純な赤と淡色のいくつかのタッチ、これが必要です——それが PELARGONIUM DIOGENE (赤) (ゼラニウムの一種) で、その五枚の花びらは衰弱し、やや崩れかかっている、代りに COLEUS BEAUTE DE VILMORE (紫蘇科の一種) の装飾的な葉がその場所を占めることもあります。これは暗赤色と緑色をしていて、もう秋がそこに達しているかのようです。

正確なデッサンもなく投げ入れられたこれらのものすべてが「訳註——ここでマラルメは円形花壇コルベイユのもう一つの意味《花籠コルベイユ》を示唆している」、ひとつのハーモニーに出会うのです。このハーモニーは巧みに花々の色合そのもので飾られて、それだけで、大胆にも、八月の真昼や午後を作り上げるのです。どのようなフランスの空の下での園芸のモチーフを再現しようとも、トゥーレーヌやプロヴァンスの大きな太陽こそがこれにふさわしいのです——つまり乾いた石のバラストの手すりや階段のそばとか、すがすがしい対比を望むなら、イギリス式芝生のまんなかとか。

通常は殆ど四種の植物です(というのは、境栽花壇は、その大きさにもよりますが、一ルイカニルイくらい値段がするからです)。それから私たちの庭園にはひとつの新奇な趣きがあります。これはすでにイギリス人において窺い知れるものですが、しかしながら、その印象の説明はまだなされてきておりません。本欄においても同様です。

〔詩と短篇——テオドール・ド・バンヴィルの詩とフランソワ・コペの短篇小説は省略——訳者〕

最近二週間の新刊とプログラム

世界の娯楽あるいは祝祭

一八七四年八月

走り書き程度の註記を若干——通常数日分の内容が入る頁に、ひと月あるいはそれ以上の内容が含まれています。これは季節のプログラムと新刊案内です。このことは言っておかなければなりません。

パリは四方の地平線に向つて扉をひらき、出かけてゆきます——外国や地方は逆に群をなして、八月の太陽と闘いながら、この開いた扉からパリの壮麗さの蠱惑を賛美しにやってきました。

そういうものは短期間のものです。ですから私たちの務めは簡単です。

社交界の情報などはありません。目を劇場や駅に転ずること。シリアス劇、夢幻劇、笑劇。駅は「海辺の駅」だけに（というのには、どんないい加減な湯治客でも温泉町の選択にはためらうことはありませんが、海ですと、いたるところ海でまよってしまいますから）。

その前に二言——

書店と競売場

展覧会

この季節こそ本を読む時期です——車室で、庭のハンモックで、砂浜のデッキチェアで。新刊本は比較的稀れです。冬の書物が夏に再版されています。最近の出版動向に追従したり、あるいは先んじたりする二つの書店が、この季節に次のような書籍を刊行したり刊行予定であったりしています——

アルフォンス・ルメール社（既刊）……長篇小説三作…アルフォンス・ドーデ『芸術家たちの妻』、ルイ・ギャル
ド『ある類似』、バルベール・ドールヴィイ『老いた女主人』——旅行記…画家フロマンタンによる『サハラ砂漠の夏』
及び『サヘルでの一年』——詩集（この社の「目玉商品」）…シユリ・プリユドム『ソネットの書』、『花の抵抗』及び
『フランス』、レオン・ヴァラッド『丘の途中で』、エルネスト・デルヴィイ『ハーレム』そしてテオドル・バンヴィ
ルによる『蓋の血』。

近刊本——フランソワ・コペ『赤の手帖』（詩集）、『戒嚴令下の牧歌』（小説）、クロデイウス・ポプラン『ソネットの四音階』。

シャルパンティエ社（既刊）——本誌執筆協力者ゾラとデルヴィイ両氏の『ブラッサンスの征服』と『大人向きの短篇集』。

アシエット社による刊行物は、勉学に励む人たちがパリに戻ってくるまでその案内を控えておきます。

『ジョアンヌ・ガイド』はまだ誰でも手に入ります。⁽¹⁰⁾

* * *

（競売場にて）——何も、殆ど何もありません。この時節は打ち水をして耐えがたく、埃が書画骨董に積もり積もっておりますが、幾世紀もの時代の埃というわけではありません。あらゆる回顧的な興味は、絵画や美術品の「展覧会」に向けられています。このため、『アルザスローレーヌ保存協会展』は一新され、二ヶ月会期を延長しております。

劇場と駅

I パリにて

伝統的にヴァカンスのシーズンでも閉鎖せずにプログラムを上演しつづけている次の劇場は別にしまして——フランス座（『ポリウクト』）ファーヴァー夫人、デュボン・ヴェルノン主演、次いで『ザイール』サラ・ベルナル主演、

オペラ座（マンブレーの『奴隷』初演）、オペラコミック座（『プロエルメルの赦し』。最近は『ミレイユ』と交互に上演。カルヴァロ夫人、イスマエル主演）——まず旅行者におすすめる豪華な、あるいは感動的な稀代の演劇は次のようなものです。これらは旅行者に敬意を表して、七月と八月の九二ヶ月間上演期間を延ばしているものです。ゲエテ座ではオペラ・ブッフ・夢幻劇『地獄のオルフェ』。これには名指揮者オッフエンバックが新しい観客のために（海）の一幕を作りました。音楽、舞台装置ともすばらしいものになるでしょう。蠅の踊りはもはやなく、代りに魚のバレエ（？）

ポルト・マルタン座では、夢幻劇バレエ『羊の足』。これはモスリン、絹、新革など、一八七四年現在の流行にしたがって、グレヴァンがデザインした衣裳を着て上演されます。

シャトレ座では、『二人のみなし子』。これはまだまだロシア人、イギリス人、イタリア人、アジア人あるいはアメリカ人など、多くの外国人たちの涙を流させることでしよう。

ジムナズ座では、『淪落』。フロマンタンとアンジュロ両夫人の舞台衣裳の競艶が見もの。

パレ・ロワイヤル座では、笑い。笑わせるに恰好の見事な冗談。まず最初は『感じ易い女』。クリュニー座では『子供』。新しい演出による成功の最初の例。

最後に、ベルヴィル座（この時期パリ第一級の劇場の一つ）。『ファールヌの罪』と『十五番地の門衛』でフレデリック・ルメートルが登場する。

オデオン座、ヴォードヴィル座、ヴァリエテ座、ブッフ座、ルネサンス座、フォーリーードラマティック座、シャトーード座、フォーリーードマリニー座などは程度の差はあれ数多くの夜間興業を行ってきましたが、毎年恒例の夏季休演に入るといふポスターが出ました。避暑を楽しんでおられる方々に以下、これらの劇場の再開をお知らせします。

オデオン座、九月一日より。当りをとった『ルイ十四世の青春』の続演。

ヴォードヴィル座、九月一日より。

ヴァリエテ座、八月一日より。『パリ生活』上演。

ブッフ座、九月一日より。『すてきな香水売りの娘』（出演テオ、グリヴォ、ドーブレー、ボネ）。

ルネサンス座、九月一日より十五日まで、エクトール・クレミユウ、エルネスト・ブラン共作による三幕物のオペレッタ『トゥルイヤの家族』上演。主演はテレザとポーラン・メニエ。

フォーリーードラマティック座、八月十五日より。『美しきブルボネーズ』と『新アキレウス』。他に『アンゴ夫人の娘』の再演。これはビルマ及びモロッコの外交使節とフランスを観光中の二百人のラップランド人のためのもの。しかし引き続きすでにリトルフの音楽による『ガルブ王の婚約者』上演が約束されています（出演——イタリア人たちの手から戻ってきたド・ボグダニ嬢、他新人二人）。

他に昼または夜の娯楽・歓楽の場所——アクリマシオン動物園（各種動物、二匹の小さなオラウータンと特に番いのキリン、さらに花園とオーケストラ）。この後は、シャンゼリゼでのコンサート。クレソンノワの指揮による数々の名手たち。

「夏のサーカス」——フランコニ氏が素晴らしいトリック「インドのトランク」を披露すべく手ぐすねひいて待っています。このトランクからは（胸のすくような完璧さで）飛び切り美しい準団員の一人が出てきます。現在すばらしいスケーターがデビュー。ゴードリツシユとキュルテイス。これは夏場の気晴し。

テアトルミニアチュール——八月十五日開始にうつつの第一等賞受賞作『ジャナップの勝利者』をもって再開。少年少女向けの戦争大作。これは大夢幻劇に取って代ったもの。出演——布と木でできた両某氏。驚きに次ぐ驚き！いつものようにポリシネラの登場。自分で観客にボンボン菓子と劇場案内を配ります。特にヴァカンスのため、いま流行の場外実演。子供たちの前での手品「インドのトランク」。これはいつもながらのこと。

化粧箱のキャンデイ入れのような「家庭の居間」——しかし前述の劇場ほどには飽は食べられません。観客はここに戻ってきて、真面目になり、成長します。真正正銘の本邦初演の出し物が、テオドール・バンヴェイルの『ペリーヌのぺてん』やミュッセの小喜劇類などの傑作の上演を中断させていますが、出し物は立派で、誠実ですらあります。

*
**

パリ及びその周辺のダンスホールとカフェコンセルは、ガス燈と星々に明るく照らし出されていますが、これについては数ヶ国語で書かれたガイド・ブックをご参照下さい。必ずや若い外国人たちをそこへ案内することでしょう。

II 急行列車にて

あらゆる駅で西駅〔サンラザール駅〕が厳密な意味でもっともパリらしい駅です。都会のまんなかの、きわめて現代的な一劃に位置していて、ノルマンディーやブルターニュなどのあらゆる上流社会の沿岸地方へ向けて急行列車を発車させています。夏がやってくると、この駅には、海が匂います。恰度、春先にヴィルダヴレーやブージュヴァル、シャトーやサンジェルマンの葉叢やパリ郊外の木立や公園が匂うように。

ノルマンディーの駅はどれもあまりに有名で、その村々には富豪の別荘があり、遅いヴァカンスで八月のはじめまで動かない人にはその駅名のリストだけを紹介しましょう。駅名を見ればためらいもなくなることでしょうから。

ノルマンディーの海水浴場——
ディエップ駅……ル・トレポー、クリエル。モットヴィル駅……サンヴァレリー
II アンココオ、ヴール。イヴトー駅……ヴレット。ル・アーヴル駅……サンタドレス。レ・ジフ駅……エトルタ。
フェカン駅……イポール、エトルタ、レ・プチットターダール。トゥルヴィルII ドーヴィル駅……ヴィレルヴィル、ヴィ

レリシュールメル、ウルガット、ブズヴァル、カブール、ル・オムヴァラヴィル、オンフルール。カーン駅
 ……リヨンシシュールメル、ルクク、ラングリユヌ、サントトバン、ベルニエール、クールスール。ペイユ
 駅……アロマンシユ、ボルタンベサン、アスネル。イジニー駅……グランカン、サントマリイデュモン。
 ヴァロニユ駅……ポールペール、カルトレ、キネヴィル、サンヴァスト。シエルブール駅。グランヴィル駅
 ……サンペール。サンマロサンセルヴァン駅……ディナールサンテノガ、パラメ。

土・日の列車(往路)と日・月の列車(復路)はよく知られています。このシーズンの期間中、週末と週明けのど
 んな時間帯にも使える往復割引の切符が発売されています。

*
 *
 *

ブルターニュの海水浴場——ここでも同様のカタログを作成したいと思います。絶景と閑静さに心うばわれた芸術家
 や素人の愛好者すべてが毎年、熱心に語っている海水浴場です。贅沢な施設がノルマンディーの断崖に建設され、近
 い将来、ブルターニュの浜辺や岩地に必ずや特別な観光客が押し寄せることでしょう。本誌『最新流行』は誰よりも
 まず先に、この動きを活字にしたいと思います。今年から、もっともそれは来年のシーズン開始のためなのですが(本
 誌の刊行は大幅に遅れますので)、本誌執筆者の一人がブレストからロワール河方面をヴァンヌまで下ったり、ある
 いは海岸沿いをモルレとサンブリウクまでのぼったりして、各地の海岸の状況を報告します。ドゥアルヌネ(ブレ
 ストールドン線)とロスコフ(本線)はホテルを備えた唯一ピトレスクな逗留地で、それらのホテルの名は若干のバ
 リジャンたちにも親しいものです。

前記の路線とオルレアン線とを組合わせたブルターニュの海岸をめぐる周遊旅行は、その折々に、ロワール河北部に位置した主要な海水浴場オーデイエルヌ、コンカルノー、ル・クロワジック、ポルニシエなどを私たちに見せてくれます。

ロワール河南部の海水浴場というと、ポルニック、サーブルドロンヌ、ラ・ロシエル、ロワイヤン、アルカシオン、サンジヤンドリリュ、ピアリッスなどですが、これらの海水浴場にはオルレアン―南仏本線によって行くことができません。

大西洋のあとは英仏海峡。あるいは海峡の一部がノルマンディ沿岸地方を浸しているような、少なくとも英仏海峡北部――

トレポールの海水浴場（アミアンからの特別の支線があります）それからブローニュ、サンヴァレリー（ケイユには馬車で）、ベルクシユールメール、カレー、ダンケルク。

海のこの宏大な一劃はすべて北部路線に属しています。この路線には十日間有効の一等車の切符が発売されています。

* * *

次に、マルセイユに達していることは言うまでもなく、東洋それ自体の、あるいはアフリカの入口である地中海の路線の名を挙げていきましょう。これらの地方がすべての輝きに恵まれる夏だけが訪れるに値する碧い地方に私たちはいるのですから、これらのすばらしい海水浴場（マルセイユ、トゥーロン、イエール、カンヌ、ニース）とモナコの海水浴場の名を挙げておかなければなりません。日差しがやわらかく、波も穏やかな地中海はそれ自体、湯治場です。魅力的でしかも知られていない若干のささやかな景観を見せる場所の名は——レック、バンドル（マルセイユ——トゥーロン間）それからサン＝ラファエルはたくさんのおアシスの連続です（トゥーロン——ニース間）。

* * *

このプログラムと各地情報の趣旨から考えても、今年は再度九月に（不幸にしてあまり時期が遅すぎますが）割引旅行のご案内をせざるを得ません。このことについては旅行会社より情報を得ております。家族旅行をなさる方は、現在あちこちの壁を埋めつくしているポスターをご覧になってご出発下さい。

スイス全土とアルザス地方は、とりわけ散策と遍路用のものですが、これは東部路線で行くことができます。

《書籍はすべて、劇場、旅行、社交界または美術に関するすべての情報もまた、モスコー街二十九番地ステファヌ・マラルメ氏宛お送り下さい。》

(編集責任者ダヴィッド)

読者との通信欄

一八七四年八月

現在まで私たちに寄せられた手紙は、先に単独で刊行したグラビア雑誌に添えられた本文を需める内容のものが主でありましたが、グラビア雑誌に関心を示された方々には、残念ながら本誌内容見本号を発送する他にその需めにおこたえすることはできません。したがって今回はこの通信欄では四月から七月にかけて出版した水彩風リトグラフの説明を代りにしたいと思います。この配本においては、水彩風リトグラフが九月の未知のファッションの代りとなっています。夏のモード雑誌や私たちの服飾見本カタログについては、次の記述が愛読者の皆様の疑問にお答えできるものではないかと考えております。

あらたまつた訪問着——一八七四年五月一日

節織絹布の栗色のペティコート。前部は長く青いジャポネーズで、玉縁を取ったラッフルのタブリエで飾られています。後部は、四つの異なつたサイズの布を重ねた襷飾りで、それぞれの襷飾りの上部に青いジャポネーズのスカート。タブリエは脇にプリーツをたくさん取っています。右裾は二つの玉結びの飾りリボン。ひとつは栗色、もうひとつは青ですが、左肩のこのリボンで右裾は留められています。栗色のバイアスが肩の方へ上がっているスカートの脇を縁取っています。斜めにラッフルの折返しがついた長いラッフルの両袖。スカート全体は淡い黒玉をちりばめた白絹のレースで飾られています。

乗馬服——一八七四年五月十五日

青いうね織絹の乗馬服。この衣服を飾る服地と同じ生地エシヤルの飾りの中に薔薇の花束模様が捺染されています。この服はこの夏たいへんヒットしたものです。異なつたサイズで自由に重ね合わされた五つの襷飾りが引裾の下部を飾る一方で、上部はヒップパットで上げられて、同じ色合の肩掛エシヤルによって留められています。タブリエで飾られた前部は、下部に四つのバイアスのついたかなり大きめの襷飾りをもっています。この四つのバイアスは、まんなかでヒップパットの飾りリボンに似たうね織絹の結び目で留められています。この結び目には青い小さな貝殻状のフリルがついて、中に薔薇色の絹の裏がついていて、これが裆まちになっています。前部にポワント(pointes)のついたコ

ルサージュ。両袖は肘まで、青と薔薇色の貝殻状のフリルがついた自由な装飾りが施されていて、このフリルがスカートの裆（まち）になったフリルと同じ色になっています。薔薇色の裏のついた青いうね織絹のフロックコートはボタンで留められた折返しで飾られています。うしろはびったり、前はゆったりした衣服です。私たちの型には両袖がありません。薔薇色のバイアスと白レースのついた青いパラソル。長いヴェールのついた、薔薇と矢車菊の房飾りと青い羽飾りのフェリックス帽。

散歩着——一八七四年六月一日

とても淡い青の節織絹のペティコート。タプリエは大きな青いラッフル仕立てで、ラッフルは青の玉縁を取った黒いバイアスで分けられています。裆（まち）は二つの黒いレースで作られていて、それによって足は青い玉縁の下に隠れます。ボタンは二つのレースの間にある青と白のタータンチェックのうね織絹に覆われています。タータンチェックの節織絹で出来た、束ねられた大きな装飾がペティコートの下部のボタンによって間隔を置いて留められています。この装飾は黒い絹のバイアスによって互いに結びつけられています。垂れ下がったレースのついた、青と白のタータンチェックのうね織絹で縁取られた、裏のついた黒い節織絹のスカート。これは後の方にある裆（まち）の上につけられて、一面では前身ごろが丸く、挿絵のモデルではうしろに隠れていて見えませんが、脇のいくつかの装飾によって軽くたくし上げられています。これとは反対に、後身ごろは四角になっていて、そのため、うしろ中央部にギャザーを作る四つの装飾が互いに重なり合って、スカートの裏になったタータンチェックの布地をのぞかせています。バンドのない、シンプルな、ただ青い玉縁だけが施されたコルサージュ。前身ごろの裾は少し開いたW字。立襟は軽く開いて、

青い節織絹の裏がついています。この種の衣服ではウエストは長く、燕尾の垂れのついたコルサージュではとても長くなりません。肩のあたりにふくらみのついたとてもすてきな青い袖には黒の節織絹のバイアス。肘からは、下から上へと、上から下への二つのレースがつけられて、タータンチェックのボタンで区切られています。ペティコートの裾と同じモチーフがもつと小さく袖口のところまで終っていて、袖口にはすてきなキャッシュエ (cachet) がついています。

遠出のための装い——一八七四月十五日

最初のペティコートは淡い黄色の色合を帯びたうね織絹でできています。同じ生地でできた三枚のゆつたりとした布がタブリエになっていて、その端はトリミング用飾り布でできた玉飾りやボタンによるチェックのとても美しい装飾りになっています。重ね合わされた三つのフリル。そのギャザーはエメラルド・グリーンバイアスの下に隠されていますが、このフリルが引裾になっています。最初のフリルはウエストまであって、ペティコートの残りのタブリエを分けています。光沢のある糸を使ったパチスト (薄地綿布) でふくらませたスカート。このふくらみは糸レースの差し込みによって分けられています。スカートの裾はピロードのバイアスと鋭角的な花綵模様のスカラップの糸レースで縁取られています。現在、この種のもものは大変流行しています。このスカートは一面だけがたくし上げられるようになってきます。前身ごろの裾がW字になって緑色のピロードで玉縁が取られた、ふくらんだコルサージュ。ウエストはうしろが丸く、とても長くなっています。ウエスト・ベルトは二面になっていて、一方が緑色のピロード、他方が黄色の色合の縞子ですが、このベルトは脇を通して、二つの大きなリボンの玉結びと一緒にスカートに垂れています。腕の内側には装飾がなく、外側がふくらんだ両袖。パチスト (薄地綿布) と糸レースの差し込みでできた直

線的な小さな肩掛^{エシヤル}。これはコルサーージュにラフな恰好に結ばれています。本物の麦藁でできた魅力溢れる帽子。これはラ・ショセールドンタン通り二十二番地のバイエ嬢の作品です。

コンサート・プロムナードの装い——一八七四年七月一日

ペティコートとサーモンピンクのうね織絹のデコレテされたタイユ。タブリエは片返しひだフリルが二列にならんで、上部は扇状にプリーツをとった付け飾りで隠されています。この付け飾りも同じうね織絹でできていて、同じ色の絹子で玉縁が取られています。これらの付け飾りを互いに繋ぎ合わせる *traverse* と *bouffe* はうね織絹の玉縁を取られた絹子でできていて、淡い黒玉のちりばめられた白い糸レースが付け飾りの下から出て、絹のフリルの上に落ちています。引き裾をもった最初のスカートは一種の宮廷服と言ってよく、ペティコートのフリルに施されたのと同じ付け飾りがついています。こちらの方がはるかに質の高いものとなっています。二番目のスカートは白絹のチュールで、白いシュニール糸で星形模様が刺繍されて、内側は淡い黒玉がちりばめられています。一種の肩掛^{エシヤル}の形をしたこのスカートは、腰のうしろがふくらむように結ばれています。ウエストベルトとサーモンピンクの節織絹でできた両袖の上部のボオ。純白の帽子、白い羽根飾り付き。これはこの夏最高の趣味。

淡いブルーのうね織絹の訪問着——一八七四年七月十五日

八八

最初のペティコートは片返し髷が横三列にならんでいます。まんなか縦にバックステッチが施されていますが、これはこのステッチのそれぞれの面の髷を返すためのものです。これらの付け飾りは縦に三度繰り返され、同じ生地、とても広いバイアスによって分けられています。裆（まち）は重ね合わされた三枚のフリルで作られていて、毛羽立った羽毛で縁取られています。うしろは、沢山の飾髷が引裾をなしています。前は、羽毛で縁取られた三枚の肩掛エシヤルがチュニックの形をしていて、プリーツが入っています。これらの肩掛エシヤルはうしろのスカートの裾で終わっています。スカートはたくし上げることができません。これは三枚の大きさの異なるフリルで飾られていて、フリルには片返し髷の折り山と、同じようなバイアスとがあつて、バイアスは羽毛で縁取られています。それぞれのフリルの下からは蝶結びのボオがのぞいています。ボオは私たちのモデルのものよりもっと大きくなければいけません。まわりがすっきり閉じられた垂れのついたコルサージュ。これはうしろを締め、腰のところは特にきつく締めなければなりません。これはコルセットの効果を出すためで、さらに鯨の髭で完全に固定されます。

盛 装——一八七四年八月一日

白いうね織絹の、裾がプリーツのフリルで飾られたペティコート。プリーツのフリルは四つのラッフルと髷のついた頭部をもつ鉤型のものです。白いシャンペリーの紗でできたスカート。これはタブリエの形で、裾はとても広く、

V字になっていて、明るいブルーの節織絹のもう一方のV字と結ばれています。この布幅のまわりにはとても美しい総飾りが施されています。スカートは白いうね織絹のバイアスと淡い黒玉のちりばめられた糸レースで飾られています。タブリエのまんなかの裾にはデザインされた昼顔の花束があります。これはまったく目新しいもので、とてもよい趣味のものであります。前身ごろが短く切れて、後ろ身ごろが垂れた白い紗のコルサージュ。背中の中央部はブルーの節織絹できています。両脇とポケットは白いバイアスとブルーの節織絹の玉縁で飾られています。前身ごろはブルーのVネックの円形の襟襷と玉縁。両袖はタブリエと同じ付け飾り。襟まわりには昼顔をデザインした襷飾り。袖口には同じ種類の花束。イタリア産麦藁のムスクテール帽。下の部分にアメリカ産鸚鵡の羽。前つばは節織絹のふくらみと昼顔の半房飾りで、一面だけが折上げられています。前部のややまんなか寄りにボオのある球帽のまわりには節織絹の撚り糸。

八月十五日の装い

今月中に発送される内容見本号の若干部数にはこのモードが含まれていて、ルーズリフに説明が載っております。これはカバーつきで発売当日に本誌『最新流行』の予約購読者の皆様にお渡しするものです。

マルグリット・ド・P

註

- (1) いづれも当時、有名な高級衣料品店や宝石店が軒を連ねていた通りの名。
- (2) ここには浮世絵の影響が見受けられる。このような画面構成は当時の印象派画家たちによって盛んに試みられた。(例えば、ホイットスラーなど)
- (3) エドゥアール・マネの『オランピア』に代表される「新しい絵画」に現われた婦人像を思わせる。マラルメはマネ擁護のため、このモード雑誌執筆前後に二度、雑誌に記事を寄せている。うちひとつはロンドンの『日刊美術評論』に掲載された。
- (4) *“opalisations”* —— マラルメの造語。そのもろさ、その不透明感、「遊色効果」と呼ばれるその色彩の変化、これらオペルの特質をマラルメは当時の文明の特質に重ね合わせている。
- (5) エドゥアール・マネを擁護した記事のなかで、マラルメはマネの『オペラ座の仮面舞踏会』が舞踏会会場ではなく回廊を舞台にしていることを大変褒めている。仮面をはずして相手が誰であるかを発見したときの人々の驚きのポーズを、“人間のカタログ”と呼んでいる。
- (6) *“rêveries”* —— マラルメの造語。*“rêve”* (夢想) に、その行為が行われる場所やその行為を生み出す道具を意味する接尾辞 *“-ies”* を付加したもの。“夢想製造器”はむろん一つの試みにすぎない。
- (7) ここでの『ブローニュ』とは『ブローニュ・ニュシユール・メール』のことで英仏海峡に面した印象派にゆかりの地である。ゾラの『ナナ』にも登場する実在のレストラン。ポワソニエール街にあって、文人やジャーナリストたちがよくここで会食をした。“ブーシユ”とは“口”のことでもちろんマラルメの仮名である。
- (8) 財界の大物ブレルが豪華なホテルを建てた公園で、アルファンによって公園の一部がイギリス式風景庭園に改造された。この公園の一角は高級住宅地で、ゾラの『獲物の分け前』で成金の主人公が新婚の家を持ったのもこの近くである。
- (9) アドルフ・ジョアンヌ『絵入バリ近郊案内』。一八五六年に初版が出て、一八七二年に大幅に増補改訂された。